APPEAL

発　行　者
JR 東海労関西地本
大阪台車検査車両所分会
２０１５年　５月２６日
NO. ７５

戦争、災害・・・失われて気づく！

「日常」を愛して

５月１７日詩人、長田弘さんのインタビュー記事が毎日新聞にこの見出しで掲載されました。

その中で「日常愛」とは何か？の問いにこう答えられています。「それが生活様式への愛着です。大切な日常を崩壊させた戦争や災害の後、人は失われた日常に気づきます。平和とは日常を取り戻すことです。」と言われています。また全詩集には、日本軍兵士の陣中日記を引いた詩の中で【焼きのり、焼き塩、なめ味噌、辛漬、鯛でんぶ、牛肉大和煮・・・戦争に行った男の遺した戦争がくれなかったもののリスト】「戦争はこうして、私たちの生活様式を裏切ってきました。こういう確固とした日常への愛着を、まだずっと書き続けたかった。戦後７０年の今、失われようとしているものがいかに大切かということを・・・」とも言われています。

安倍首相がいう「米国の戦争に巻き込まれることは絶対にない！」「戦争法案などといった無責任なレッテルは全くの誤りだ！」・・・は本当だろうか？

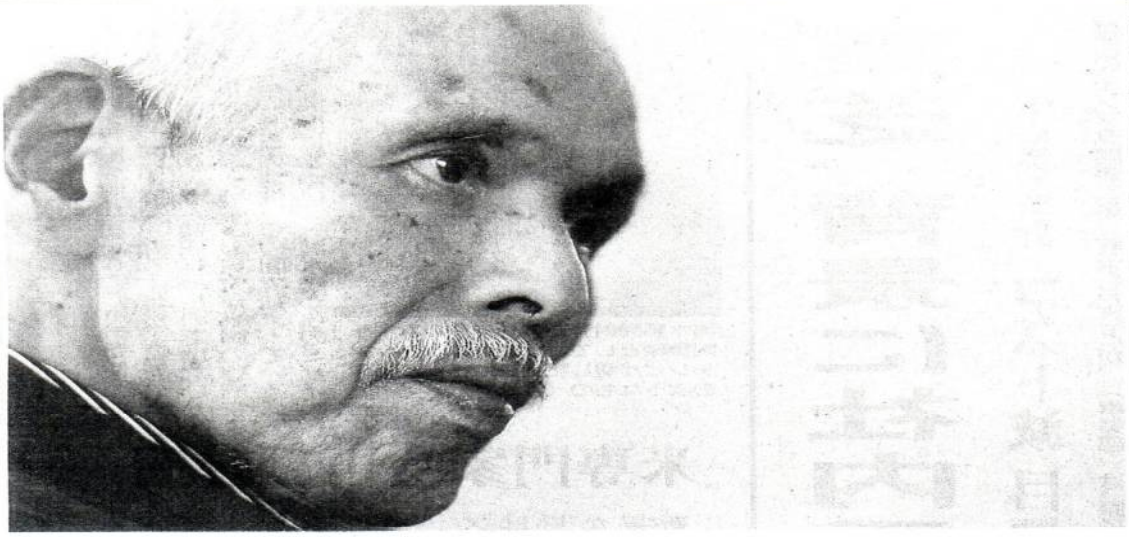
安全保障関連法案と主な内容
＜新法＞
・国際平和支援法案
　外国軍への後方支援（国際社会の平和と安全）
＜現行10法の改正＞
・武力攻撃事態法改正案
　集団的自衛権の限定的行使（存立危機事態）
・自衛隊法改正案
　武力攻撃がなくても米艦などを防護
　在外邦人の救出
・重要影響事態法案（周辺事態法を改正）
　外国軍への後方支援（日本の平和と安全）
・国連平和維持活動（ＰＫＯ）協力法改正案
　国連主導以外の活動にも参加
　武器使用基準を拡大
・船舶検査活動法改正案
　大量破壊兵器運搬船などを検査対象に追加
・国家安全保障会議（ＮＳＣ）設置法改正案
　法改正の内容を審議事項に追加
→以下の法案にも、集団的自衛権行使に関する規定を追加
・米軍行動関連措置法改正案
・特定公共施設利用法改正案
・海上輸送規制法改正案
・捕虜取り扱い法改正案

長田弘さんの言葉と裏腹に現在安倍政権は５月１４日、安全保障関連法案を閣議決定しました。この法案は集団的自衛権の行使を可能とし、憲法９条に基づく専守防衛を根幹としてきた安全保障政策の歴史的な転換（憲法９条の実質的な破棄）に道を開く内容になっています。新法１法・現行１０法の改正（１０法をまとめて平和安全法整備法案）の２本立てで国会会期を延長して７月末に法案化を急いでいます。その日の記者会見で安倍首相は「時代の変化から目を背け、立ち止まることはやめよう。子ども達に平和な日本を引き継ぐため、自信を持って前に進もう。」と言っています。まさに表ではきれい事を並べ腹の中は戦争できる道づくりに突き進んでいます。

今こそ私たちは詩人、長田弘さんが言われている「日常愛」について冷静に見つめ直す必要があると思います。そのことを通じていかなる戦争政策にも「ＮＯ」を突きつける声をだして行きたいと思います。

毎日新聞 2015.5.17 第47675号 明治25年

戦争、災害…失われて気づく



亡くなる前日、インタビューに応える詩人の長田弘さん＝東京都内で2日、竹内幹撮影

「日常」を愛して

死の前日 長田弘さんの信念

5月3日、胆管がんのため75歳で亡くなった詩人の長田弘さん――。逝去の前日、毎日新聞のインタビューに応え、刊行されたばかりの「長田弘全詩集」（みすず書房）に託した思いを語った。やさしく静かな詩人の言葉は、揺るぎない「日常愛」の信念に支えられ、それが最後のメッセージとなった。【井上卓弥】

2日午後、東京都内のお宅を訪ねた。ソファに腰掛けた長田さんはじっと目に見えない何かを見つめるように、一語一語ずつ話し始めた。

「最近、愛国心という言葉がよく使われますね。でも、うじぶんにとっての詩の変わらぬ主題……。パトリオティズムとは「日常愛」のことだ。「愛国心」とする日本語は当たらない。……パトリオティズムは宏量（こうりょう）だが、ナショナリズムは狭量だ。〉

「日常愛」とは何か。「それが生活様式への愛着です。大切な日常を崩壊させた戦争や災害の後、人は失われた日常に気づきます。平和とは、日常を取り戻すことです」。時折、声を詰まらせながらも、絞り出すように話し続けた。

長田さんは1960～70年代、アウシュビッツやスペイン市民戦争（36～39年）の痕跡を訪ねている。先の大戦で大きな空襲被害を免れた故郷・福島は4年前、戦後最大の震災に見舞われた。

「場所と記憶」にはもう一つ、詩人の原点を示す一節がある。

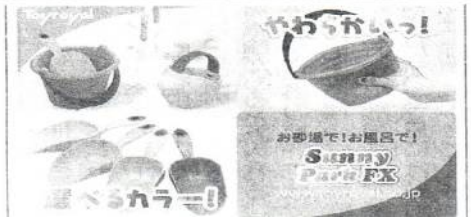
〈一九六〇年、詩を書きはじめる。……第一次大戦で戦死したウィルフレッド・オウエンの詩を知り、オウエンの「詩はpitのうちにある」という詩に対する態度に、決定的な影響を受ける。〉

82年刊行のエッセー「私の二十世紀書店」もオウエンの詩で締めくくられていた。「大戦終結の1週間前、25歳のオウエンは西部戦線で亡くなりましたね。pitは普通、哀れみと訳されますが、私は失われたものへの愛情と考えてきました」。しばらく黙ったまま、33年前の本に視線を落としていた。

「全詩集」には、日本軍兵士の陣中日記を引いた詩も収められている。

〈「……／焼きのり、焼塩、舐め味噌、辛子漬、鯛でんぶ、牛肉大和煮／……」／戦争にいった男の遺した、戦争がくれなかったもののリスト。〉

「戦争はこうして、私たちの生活様式を裏切っていきました。こういう確固とした日常への愛着を、まだずっと書き続けたかった。戦後70年の今、失われようとしているものがいかに大切かということを……」

別れ際、長田さんは「窓を開けると、風の音や誰かの声、新聞配達の音――そういう日常が聞こえてくるんです」とつぶやいた。その口調は穏やかだった。

おさだ・ひろし　1939年、福島市生まれ。「私の二十世紀書店」で毎日出版文化賞。詩集「幸いなるかな本を読む人」で詩歌文学館賞。昨年、詩集「奇跡―ミラクル―」で毎日芸術賞を受賞した。